

氏 名	ギエム フオン トウイエン Nghiem Phuong Tuyen
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 23 号
学位授与の日付	平成 17 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	Town-Village Interactions and the Roles of District Towns in the Development Process in Vietnam's Northern Mountain Region (ベトナム北部山地の発展過程における都市-農村関係と郡都の役割)
論文調査委員	(主 査) 教 授 速 水 洋 子 教 授 田 中 耕 司 助教授 河 野 泰 之

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、ベトナム北部山地における地方都市の役割がドイモイ前後でどのような変遷を遂げているかを現地調査に基づいて検討し、政策に見られる地方都市に対する一元的な規定を問い直す試みである。そして、同地域の都市-農村関係が、タテ型に連なるのではなく、広がるネットワークとして発展しつつあることを指摘する。

農村開発における地方都市の役割は、都市計画や開発研究において盛んに議論されてきた。地方都市はその周囲に広がる農村部に対して成長の核としての役割を担うという中心地理論による議論がある一方で、逆に都市は農村開発に対して益をもたらさない、あるいは寄生的な位置にあると論じる立場もある。ベトナム山地の場合、都市と農村の相互関係についての実証的な研究は皆無に等しい。本研究では、ラオカイ省バオタン郡の郡都であるフォールー市と、その周辺3農村における調査に基づいて、広大な山地部の開発における地方中核都市の役割を考察する。そのために、第一に地方都市の役割と機能が、特にドイモイと総称される国レベルの経済改革の前後でどのように歴史的変遷を遂げたかを記述し、第二に、現時点での農村開発におけるフォールー市の機能について分析し、第三に農村部の住民の郡都を始めとする都市部との関係について論じる。

まず第1章で上述の理論的背景を紹介し、本論文の位置づけを行った後、第2章では、地方都市の役割の歴史的変遷を文献資料に基づいて検証する。仏領期以前、中央政府の行政機関として機能していたのはごく少数の都市にすぎなかった。仏領期には、新しい機能を担う都市が多く建設された。社会主義化以降、国内の地方都市の数は増加したが、都市人口はそれほど大きく伸びなかった。1950年代後半以降の集団化の時代になると、地方都市は、農村の生産物を集積して都市に供給する、あるいは、都市から農村への消費物資を供給するための結節点としての役割を政策的に付与された。しかし、1980年代後半に開始された経済改革以降、農村に暮らす人々は、それぞれの郡都にもはや依存する必要がなくなった。交通網や流通制度の改善、地元の市場構造の展開や、農村部での各種サービスの向上により、農村部と都市部の相互関係には大きな変化が生じ、郡都が農村開発に果たす役割も大きく変化した。

第3章では、こうしたことをより細かく検証するために行った現地調査について、その概要と調査地を紹介する。続く第4章で、本論で扱う郡都フォールーの現状についてデータが提示され、その経済的な機能として農産物の集荷、消費物資の分配、雇用の創出、サービスの提供という4つの機能について分析する。農産物の集荷と消費物資の分配機能に関しては、地方都市の商人は、経済規模や資本の不足により省都などのより上位レベルの都市の商人と競争する力がない。交通網の改善により、経済規模の大きな省都や他の都市を基盤とする商人が郡都レベルの商人を介することなく、村レベルまでやってきて、直接経済活動を行うことができるからである。雇用創出に関しては、郡都としての経済規模の小ささを反映し、市内で仕事を見つけることはほとんど期待できない。また、小規模な産業やサービス業に関する分析からは、郡都の産業では原材料をほとんど郡外から輸入しており、地域の労働力を吸収するには限界があることがわかった。一方、サービスを提供する場として郡都は大きな役割を担っており、また郡の予算規模が公共サービスの提供に影響していることがわかった。ただ

し、民間のサービス業も含めて郡のサービス業が省レベルのサービス業と厳しい競争にさらされている。

第5章では、同じ郡都と農村部の相互関係を農村の側から検証する。農村部の産品は、そのほとんどが農村や郡都、省都の仲買人によって農村にて売買される。農業外の経済活動、消費物資の購入、サービス利用などについて村人の行動パターンを見ると、周辺都市で活発におこなわれており、より大きな地域的な相互関係の広がりが見られることがわかった。消費活動は省都にも及び、またサービス利用はさらにハノイや国境を越えた中国側にまで広がっている。本研究で分析の対象とした地方都市と村人との関係は3つの村落で異なる様相を呈する。その理由は、交通手段や地理的条件、村人の家計収入の程度、情報へのアクセスや社会関係の広がりなどによって説明できることがわかった。

第6章では、以上の分析から、結論を導く。地方都市であるフォーラー市と周辺村落との関係は時代と共に大きく変わってきている。主に郡都と農村の相互関係について、社会主義時代に形成された垂直的でヒエラルキカルな都市から農村にいたるシステムとは異なり、農村はもはや郡都のみを通じて外部世界に連なるわけではない。当時の開発理論において地方都市に付与された役割のいくつかは、現在ではむしろ脱中心化して村落レベルで形成されてきた結節点に分散され、それが都市のヒエラルキーに新たな要素を付け加え、より広い地域的ネットワークが形成されている。ただし、この結節点は都市にとって代わるようなものではなく、ますます相互依存的なネットワークの広がりを形成していつている。その結果、それぞれが担う役割は、交通システムや流通網の改善のような外部要因によって変化を遂げていくと考えられる。

論文審査の結果の要旨

ベトナム北部山地は、19の省都、139の県都が散在する広大で起伏に富んだ地域である。中国とラオスと国境を接し、開発の途上にあつて様々な可能性とともに環境問題や貧困問題などを抱えている。ベトナムでは農村部の開発の中心として、また貧困解消のための商品作物の集積地などとして県都を僻地の中心に据えて開発政策を展開する。しかし、ドイモイ以降のベトナム北部山地の人々の活動領域は、経済活動を中心に見ても、多様化し広域化しており、このような上からの政策の意図と必ずしも対応していない。本論文は、こうした現状を理解し、開発における地方都市の役割について重要な分析を提示し、提言を行っている。

ベトナム北部山地は、いまだに調査が容易な地域ではなく、長期滞在調査に基づく研究は限られている。また、本研究のように地方都市とその周辺の農村をつないだ広域の視点から現在の経済・社会的な変化をとらえるような研究はほとんど見られない。その意味で、本論文は今後活発になるにちがいない同地域の研究のための重要な足がかりを築いたといえるだろう。

論文は、まず開発と都市をめぐる理論的な整理と枠組の提示を行っている。そうする中で開発における中心地理論が現在のベトナムの地方都市の役割を理解する上で適当であるかを問うている。その後、歴史資料と二次文献に基づく地域の都市を中心とする歴史の変遷を把握する。仏領期以前から変遷をたどるが、特に強調点がおかれるのは、ドイモイの前後の変化であり、その比較分析を通じて現在の地方都市の役割をより明確に描き出している。そして、インタビューや世帯調査を中心とする現地調査に基づいて県都である地方都市とそれを取り巻く3つの農村の相互関係を比較検証し、地方都市の役割を、①農産物集積、②消費物資市場、③雇用創出、④サービス提供という4つの機能について検証する。3村落を比較することにより、村落の経済・社会・地理的状況が地方都市との関わりにどのように影響するかを比較可能にしている。

本論文の評価すべき点は、以下の通りである。

1) ベトナム北部山地について地方都市を中心とした地域の歴史の変遷を仏領期以前から現在まで主に文献調査によって明らかにしている。特に、ドイモイ前後の相違に焦点を当てることで、北部山地地域における都市と農村の相互関係の変遷を描いている。

2) ベトナム北部山地の地方都市の経済・社会的現状を、インタビュー、市場調査などにより、特に上述の4つの機能を中心に分析している。そうすることで、ベトナムの地方都市と農村の関係は一元的な中心地理論のモデルでは理解できないことを指摘し、ベトナムの開発政策における地方都市の付置の再考を促している。

3) ベトナム北部山地農村の世帯経済が自給自足的な農業生産から、商品作物生産へと切り替わっていく過程にあることを世帯調査を通じて明らかにし、世帯毎にどのような外部との関わりを選択しているか、特に人や物の動きがドイモイ期以降

どのように活発になり広域化しているかを詳細なデータによって分析している。

4) 以上の分析から、ベトナム北部山地における地方都市（県都）の役割が実は限定的なものであり、同地域の経済・社会的動態にはより多角的な理解が必要であることを指摘している。

5) 都市―農村ネットワークについての理論（地域ネットワーク分析）をベトナム北部山地に適用できることを指摘し、同地域の理解に新たな視点をもたらすとともに、開発と地方都市に関する理論的な検証を行った。

申請者は、ベトナムの研究者であるが、それでも北部山地の調査活動を全く自由に行えるわけではない。そうした中で、ドイモイ以降のベトナム北部山地における人と物の流れの地域的拡大を把握し、世帯経済の変化を描き、従来の地方都市に中心を一元化した見方の再考をせまる本論文は、ベトナム北部山地や農村開発における都市の役割を理解する上で重要な貢献であることは間違いない。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年3月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。